

片山右京

環境問題に、それぞれのスタンスで取り組む「エコ人」たち。

第1回は、天ぷら油を燃料にパリダカを走り抜いた

元F1ドライバー、片山右京さんの登場です。

写真／キッチンミノル



100%バイオフェューエルを燃料とする、トヨタ・ランドクルーザー100。パリダカの過酷なラリーをこの車で完走した。



天ぷら油で、砂漠を駆ける。

それは彼にとって、新たな冒険のはじまりだったのだろうか。

モータースポーツの頂点であるF1で、スピードの世界を駆け抜けた片山さんは、その後も、まるで冒險への衝動に駆り立てられるかのように、毎年世界の高峰に挑み続けてきた。そして、今年1月、驚くべきニュースが日本に伝わってきた。片山右京、天ぷら油でパリダカ完走。

ダカール・ラリー、通称パリダカは、ヨーロッパ大陸からアフリカのダカールまでの約9千キロを、2週間かけて走破する国際レース。この世界一過酷といわれるラリーを、片山さんは、使用済み天ぷら油を原料とするバイオディーゼル燃料（BDF）100%で、見事に走りきった。もちろん世界初の試みだ。BDFのよきなバイオ燃料は、大気中のCO₂を増やさない、地球温暖化防止に役立つエネルギーとして、近年注目を集めている。日中の気温が50℃を超える砂漠を走り抜いたという事実は、BDFの信頼性を格段に高めた。「パリダカは世界有数のレースだけど、実は出場者の環境に対する意識はすごく低い。俺自身今まで参加してきた中で、みんながタイヤやオイ

ルを自然の中に捨てているのを見た。だからこそ今回のようなチャレンジが、アンチテーゼになると思ってたんだ。今までクルマでメシを食べてきたからこそ、クルマを通じてメッセージを送りたかった」

片山さんが環境問題に目覚めたのは、3年前のヒマラヤ登山がきっかけ。温暖化の影響で氷河が後退しているのを目の当たりにして、大きなショックを受けた。帰国後、客員教授を務める大阪産業大学で学生を巻き込んだプロジェクトを立ち上げ、今回の参戦にこぎつけた。

「若い頃は、有名になりたい、お金持ちになりたい、女の子にもてたいって、自分中心に回っていたのが、子どもも生まれて価値観が変わってきた。社会人として、ひとりの大人として、新たなモチベーションがわいてきたんだ」

今回の挑戦をただのパフォーマンステで終わらせるつもりはない、と片山さんは話す。「BDFの可能性を証明した次へのステップとして、ビジネスモデルとしてもきちんと成立させていきたい」——エコロジイという新たな冒険のフィールドを、片山さんは見いだしたようだ。



片山右京（かたやまうきょう）1963年生。F1に6年間連続参戦、日本人最多出場を記録すると共に、1994年当時の日本人選手最高位である5位を記録。最近では登山などのアドベンチャー領域でも活躍するほか、環境問題にも取り組んでいる。

